

十代の四季

four seasons of teen-ager

産婦人科医からみた思春期の性

上田 基



ミネルヴァ書房

十代の四季

four seasons of teen-ager

産婦人科医からみた思春期の性

上田 基

＜著者紹介＞

上田 基 (うへだ もとい)

兵庫県立神戸高校卒業。

日本医科大学卒業。

現在 マムクリニック院長。産科・婦人科医。TOG (東京オペグループ) 会員。朝日生命嘱宅医。

主著 神戸市性教育研究会編『とまどわないでお母さん』
(共同執筆) 神戸市健康教育公社, 昭和58年など。

現住所 〒651-13 神戸市北区有野町唐櫃3389

マムクリニック ☎078-982-1188

十代の四季——産婦人科医からみた思春期の性——

1988年6月10日 初版第1刷発行

＜検印廃止＞

定価はカバーに
表示しています

著 者	上 田 基
発 行 者	杉 田 信 夫
印 刷 者	坂 本 嘉 廣

発行所	株式 会社 ミネルヴァ書房
	607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
	電 話 (075) 581-5191 (代表)
	振替口座・京 都 2-8 0 7 6 番

©上田基, 1988

内外印刷・清水製本

ISBN4-623-01831-8

Printed in Japan

十代の四季
目次

序 章

エッチって何？ 2

新芽たちのマンコロジ 5

若葉たちのチンコロジ 8

春の章

春の一日 14

母親たちのマンコロジ 20

母親たちのマンコロジ パートⅡ 30

父親たちのチンコロジ 37

夏の章

産まぬ地獄か 産む地獄か 46

十代の人工中絶顛末 59

恋愛講座 71

医師たちはいま——小さい生命も生命です 83

ある愛の形 95

秋の章

学校では、先生たちはいま—— 108

避妊講座 124

看護婦たちはいま——人工中絶を考える 131

強姦(?)と思春期 140

よだれかけと予防医学 146

私の思春期外来——その未熟性と顛末 155

冬の章

十代の妊娠——子宮外妊娠 164

恋愛講座 パートⅡ 173

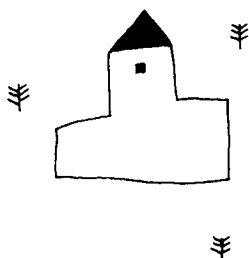
キャラメルママと純潔教育 184

細く長くの思春期外来 198

終章——めぐる春

あとがき

序
章



エッチって何？

十代の人工妊娠中絶が増えている。これは、マスコミの喧伝ではなく、現実の問題として増えているのです。主婦層の人工中絶が減少するのに反比例して増えているような気がします。

ところで、いまよくいわれる「旧人類の皆さん」へ質問したいのですが、

1 エッチって何かわかりますか。

2 ABCDのAって何かわかりますか。

3 ナンパするってどんなことかわかりますか。

1 エッチっていうのは、「HENTAI（変態）の頭文字からきてるんで助平のこと」

この解釈は？ 新人類的というと「ブー」です。すなわち不正解！ では、そもそもなぜ？ なんのことはない。セックスあるいは性行為を指すことのようにです。

2 ABCDは？

「ABCDは、性的親密度を指し示すことで、Aは手を握ることでしょう」

これも新人類的というと、半分が「ピンポン」（正解）で、半分が「ブー」（不正解）です。A

BCDが性的な親密度というのは正解なのですが、いまや、新人類は、ステップAの段階は手握るくらいのことではないようです。すなわち、Aはキスを示す隠語です。

3 ナンパするっていうのは、硬派軟派に端を発しているのですが、ガール・ハントやボーイ・ハントのこと、俗っぽくいうと、ひっかけること、古い言葉では陸釣りのことです。

さて、あなたの正解はいくつあったでしょうか。今度は、逆に「新人類」と呼ばれる皆さんへ、質問してみましょう。

逆さことばの遊びを知っていますか。そう、子どもの頃やった「竹やぶ焼けた」の逆さ、竹やぶ焼けた、シンブンシの逆さの新聞紙のあれです。なんだばかばかしい、なんていわないで下さい。面白いものもあるんですよ。ちょっと、変わった逆さ言葉の遊びをやってみましょう。

「坊ち足袋^{タビ}なし」をやってみて下さい。

「しなびた○○○」となります。これは、尾崎士郎の『人生劇場』という小説のなかに出てきます。

次は「問屋の米を、買いたい買いたい」です。

これは「痛い^{いた}か、痛い^{いた}か、○○○のヤイト」となります。これは出所不明です。

だんだんエスカレートしますが、こんなのはどうでしょう？

「婿^{むこ}行く盆地^{ひんち}に、こんまい月」

これは、個々にやってみて下さい。私は、ちょっと遠慮させてもらいます。

さて、新人類や旧人類といっても、しょせんは同じ人間、両方の健康な人間に共通しているこ

とは実にいろいろありますが、その一つは性的なことがらだ、と思います。

私は、Y談は大いにやればいいと思っています。Y談の上手、下手は話術の上手、下手につながるように思えます。またY談をお互いにしあうと、妙に親近感が湧きます。おそらくこれは、性というものが、人間の生（生命）に深く結びついたホカホカした暖かいものであるからだろうと思います。

ただし、大いにY談をするのには、時と場所も選ばねばならないでしょうし、ある程度“性”というものが見渡せた段階での話なのかもしれません。

大昔、日本人は、もっと性に関してオープンだったように聞いています。どうも、儒教思想が行き渡りはじめた頃から、性的なことがらは、陰湿で暗い、大声では話ができないものとなってきたのではないのでしょうか。

“青い山脈”という歌があるのをご存知ですか。「若く明るい歌声に……」というあれです。これをY歌的替え歌にすると「チチも出てきた、毛も生えた、お尻も大きくなりました」となります。きつとほかの種類の替え唄も何万種類もあると思います。こんなふうに話していくと、とても愉快に思えてきます。

もっともY歌の多くは、女性を蔑視したものが多く、と反発をくらうこともあります……。このように楽しいはずのちょっと性的な話が、妙に歪められ、とても笑えない話になっていくのです。

冒頭にも書きましたように、十代の中絶が増えています。もっとも十代の出産も増えています。

私、江本大志^{ひろし}は、団塊の世代に生まれ、産婦人科の医者をしています。日常の診察をしていくなかで、特に思春期の性にまつわるあたりに問題があるように思えてならないのです。これから、私の日常のできごとを拾いあげていこう、と思います。

ご一読されて、もう一度、お互いに、性のあり方について考えてみようではありませんか。

新芽たちのマンコロジー

北風がゆるんてくることはいいことだ。厚い外套を着ていた樹々にも、少しずつ新芽が出てきはじめた。

私は、相も変わらず患者と向きあっている。

「どう？ だいぶ慣れましたか。お子さんも二人になると、大変でしょう」

「大変なのは、いいんですが、上の子が赤ちゃんのおちんちんを見せろって、やかましいんです」

「あのお兄ちゃんが？」

「一つの性教育や、思うて見せてはいたんですが、友達をソロソロ連れてくるのには、閉口しま

す。あんな三つ四つの子どもでも、性的なことに興味があるのでしょいか」

「そりゃあ、ありますよ。ただ、親たちが考えている次元のものじゃなくて、自分にはないものに對する不思議な感が強いんだと思いますよ」

「でも、毎回毎回、妹のオチンチンを見せるわけにもいきませんから……」

「男と女の違いを教えてあげればいいんですよ」

春名さんは、私が大学病院に勤めていたときからの患者さんだ。私が、この病院に移るとともに、彼女もこっちへやってきた。当のお兄ちゃんは、四歳。私が新米の頃、とりあげた子どもだ。今年から幼稚園に行っている。彼は、赤ちゃんができるできると大はしゃぎだった。本当は弟ができて、自分の家来にしたかったようだったが、妹でもけっこう満足をしているようだ。

最初は、妹に母親をとられたようで、少々新しい出現者に嫉妬もしたようだが、いまはお兄ちゃんとして、落ち着いてきた。ただ、難点は、春名さんの口を借りれば、女の子のオチンチンに興味をもちだした、というところか。毎日、友達をゾロゾロ連れて妹のオチンチンを見にくるのは、実にユーモラスだ。腕白どもの、ピカピカ光る瞳を、想像するだけでも楽しい。

そう、性は本来、あっけらかんとしたものだったはずが、どこでどう間違ってきたんだろうか。お風呂に入って「お母さんのオチンチンはどこにあるの?」というのも、よくある話だ。これも、自分で答えられる範囲で嘘のないように回答すればよいように思う。彼らは、恥しいものだとは思っていない。外界への興味でいっぱいなのだ。

あくる日、春名さんに紹介されたという野尻さんがやってきた。おめでた（妊娠）のようであ

る。野尻さんを診察している間、天然パーマのお嬢ちゃんが、チョコチョコとアチコチした。

「野尻さんは、春名さんのご近所ですか」

「ハイ、同じ団地の棟です」

「そうでしたか。じゃあ、お宅のお姉ちゃんは、春名さんのお兄ちゃんと一緒には、オチンチンを見にいかないんですか」

「いいえ、それが、見にくいですよ」

「でも、自分も同じでしょうに……」

「おつきあいなんですかしら？」

野尻さんは、天然パーマの娘さんによく似た眼をしてコロコロと笑った。しかし、次の瞬間、真顔になって、

「先生、妙なことをお尋ねしますが、よろしいでしょうか。もう、私が最後です」

背後をふり向いて外来患者の人数に、念を押すようにしてから、私に向き直った。

「主人が、智華^{ちか}、娘のことなんです、この子は異常じゃないか、というんです」

「はあ？」

「まだ、三つやそこいらの娘が、オチンチンを机の角っこで、こすりつけてうっとりした顔をしている。この娘は、生まれつきの色情狂じゃないかって……」

「オナニーをしている、とおっしゃるのですか」

「エエ……」

野尻さんは赤くなって下を向いた。本当に三、四歳の女の子が、オナニーをすることがあるのだろうか。大人の感覚でいうオナニーであれば「ノー」である。多くは外陰部がかゆくて、こすっている場合と、他の多くは、親の愛情が不足している場合があるようだ。たとえば、いままで愛情を一身に受けていたのに、次の子どもができることによって、お兄ちゃんやお姉ちゃんが構われなくなったときなどに、おこることがあるようだ。

新芽たちのチンコロジーやマンコロジーは、性的な興味そのものではなく、外的な好奇心や探究心からくるものや、また、本人もまったく気がつかないうちに、環境変化に対しての自己表現の一つとして、現われることが多そうだ。

若葉たちのチンコロジー

窓から見える春霞は、さほどでもなかった。なかなか彼らは話しはじめなかった。妙なオッサンがきた、とも思ったのだろう。講演に呼ばれて、演台に立った私は、つつい窓の外へ目を見るが多くなった。それでも、私が自分の初恋の話をしたら、ようやくのことですのってきた。ひとしきり、私の初恋の話が終わって最初に手をあげた男の子は、

「先生。あそこむけるの、痛いんか」

実に唐突な質問であった。しかし、これは私と彼らの親愛の情をつなぐ、太いパイプになるはずであった。私は、すぐに応じた。

「自然にむける人は、痛くない。そやけど、先生は痛かった。なんでやいうたら、無理やりむいたからや」

痛そうに顔をしかめる者、興味深げに私の顔を探る者、さまざまである。

「僕はな、クラブ活動をやとったんや。あるとき合宿があつてな。下級生と風呂に入る機会があった。下級生のなかには、僕よりも大きなチンポコをしとるやつもおる。しかし、そんなもんチンポコが立ったときは絶対、僕のほうが大きい、と思うとったから、エエとして。僕の自尊心を損なわすことになったんは、包茎でない奴がいる、ということやった。僕は、合宿の二日目に同級生の友達と一諸に無理やりむいてしもうたった」

「痛うなかつたですか」

最前列のニキビ面の少年が、気の毒そうな顔をして尋ねた。

「そら、痛かつたわな。特にオチンチンがパンツにあたったり、こすれたりすると丸一日くらいはたまらんかった」

少年たちは、十三、四歳、変声している者もいたが、多くは青年というより、まだ幼さが残る男の子が多かった。

「先生、エッチしたのは、いつですか」

「そんなこと、聞いてどうすんねや……？」

少年はちょっと困惑したような顔をして頭をかいた。

「ホナ、君はいつや？」

「そーんな、まだですよ。」

「僕はな、十六歳から十七歳の間くらい、やったと思うワ」

「進んでるー！」

「エー！」

一時、騒然となった。少し静かになってから、

「けど、どんな感じやったか、そのときのことあまり覚えてない。やっぱり、ホンマに好きな人とセックスしたときが最高やったような気がする」

と話した。それから、いろんな質問が飛びだした。湧きだした、といったほうが適切だったかもしれない。あとは、本当に汲めどもつきぬ泉のようだった。私は、答えうるかぎりの回答はした。

予定時間をはるかにオーバーして講演は終わった。講演といった代物ではない。なれあいのオープンY談コンクルの話し合いといったほうが、よかったかもしれない。先生からの時間的ドクター・ストップがなければ、私は次の日、声が出なかったかもしれない。

この男子校の先生から性教育の講演依頼があったときには、だいぶ躊躇したが、生徒たちだけのなかに、私自身が入って話し合ったのは成功だったように思えた。と同時に、マスコミが喧伝

するほど、新人類たちは性的に進んでいるのではなく、やはり、私たちが、同年代に知りたかったことと、同じことを聞きたがっており、視聴覚からだけの押しつけでは、納得いかない面が多々あるのだと感じた。

たしかに驚くべき新人類も一部ではあるが存在する。しかし、若葉たちの性的な乱れが云々されるのなら、その原因の一部は彼ら自身にあるかもしれないが、大部分は、旧人類である私たちにあるのではないかと思えるのだ。